

病害虫発生予報 第4号（7月予報）

和歌山県農作物病害虫防除所

＜予報の概要＞

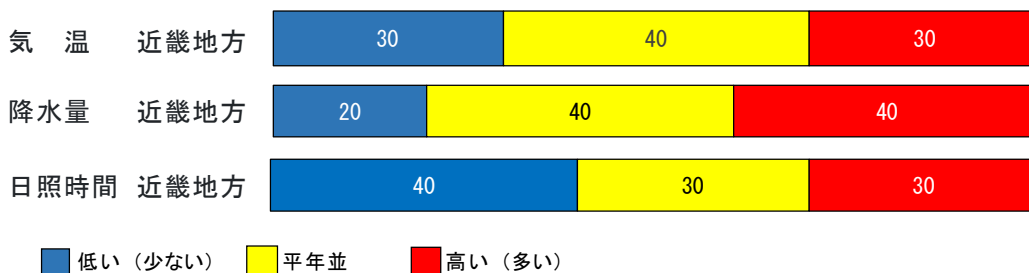
作物名	病害虫名	発生量	作物名	病害虫名	発生量
水稲	いもち病	並並 やや少 並並 並並 並並 並	野菜全般	ミナミキイロアザミウマ	やや多 並 並
	紋枯病			ミカンキイロアザミウマ	
	縞葉枯病		カンキツ	黒点病	やや多 並 やや少 やや少 並 並
	ヒメトビウンカ			かいよう病	
	ツマグロヨコバイ			ミカンハダニ	
	セジロウンカ			ヤノネカイガラムシ	
トビイロウンカ	チャノキイロアザミウマ				
コブノメイガ	ゴマダラカミキリ				
ウリ科野菜	疫病	並並 やや多 やや多 (スイカ： 県中部 多)	カキ	炭疽病	やや多 並 並 やや多 並
	うどんこ病			うどんこ病	
	つる枯病			円星落葉病	
炭疽病	角斑落葉病				
ナス科野菜	疫病	並	モモ	せん孔細菌病	並 並
				カイガラムシ類	
野菜全般	アブラムシ類	並 県北部 並 県中部 やや多	果樹全般	カメムシ類	やや少
	ハダニ類				

気象予報

近畿地方 1か月予報（06/26～07/25）

2021年06月24日14時30分 大阪管区气象台 発表		
向こう1か月 06/26～07/25	天候	平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
1週目 06/26～07/02	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目 07/03～07/09	気温	2週目は、平年並の確率50%です。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）



I. 水 稲

1. いもち病（葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の発病株率は0%（平年0.1%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 低温、日照不足、長雨が続きと発生しやすい。

② 補植用苗は葉いもちの発生源となるので、早急に処分する。

③ 常発地や罹病性品種（「コシヒカリ」、「キヌヒカリ」等）の栽培ほ場では初発時期に注意し、発生がみられたら直ちに薬剤防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の発病株率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の普通期栽培における前年9月上旬の発病株率は5.2%（平年18.6%）であった。

③ 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 梅雨明け後の高温期から病勢が急激に進展するので、常発地や前年の多発ほ場では幼穂形成期～穂ばらみ期の防除を徹底する。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の発病株率は0%（平年0%）であった。

② 県北部および中部の本田における前年の発生面積率は0%（平年9%）であった。

③ 県北部におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、和歌山市3.3%（平年8.2%）、かつらぎ町1.3%（平年9.5%）であった。

④ ヒメトビウンカの7月の発生量は平年並と予想される。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ヒメトビウンカの防除を行う。本虫の第2世代成虫は6月下旬頃に水田に飛来し、第3世代幼虫の発生最盛期は7月上旬頃と考えられる。前年に縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

4. ヒメトビウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の25株あたり生息密度は0.2頭（平年0.2頭）であった。

② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市1頭（平年1.6頭）、上富田町0頭（平年0.4頭）、那智勝浦町0頭（平年1.4頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 育苗箱施薬剤を施用した6月田植えのほ場では、縞葉枯病の発生が認められる地域以外は7月の防除は必要ない。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の25株あたり生息密度は0.5頭（平成0.3頭）であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市14頭（平成4.1頭）、上富田町0頭（平成28.7頭）、那智勝浦町2頭（平成14.1頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 育苗箱施薬剤を施用した6月田植えのほ場では、7月の防除は必要ない。

6. セジロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の25株あたり生息密度は0.7頭（平成0.4頭）であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成3.0頭）、上富田町0頭（平成5.4頭）、那智勝浦町9頭（平成8.7頭）であった。
- ③ 予察灯への初飛来は、紀の川市5月4日（平成6月26日）上富田町5月17日（平成6月17日）、那智勝浦町5月17日（平成6月11日）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ツマグロヨコバイに準ずる。

7. トビイロウンカ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の25株あたり生息密度は0頭（平成0頭）であった。
- ② 予察灯による6月1～20日の誘殺数は、紀の川市0頭（平成0頭）、上富田町1頭（平成0.2頭）、那智勝浦町0頭（平成0.4頭）であった。
- ③ 予察灯への初飛来は、上富田町5月14日（平成7月10日）であった。紀の川市（平成7月21日）、那智勝浦町（平成7月1日）では6月20日現在、飛来を認めていない。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 発生ほ場では、出穂前の防除に努める。本虫は株元に多く生息するので、薬剤が株元に届くように散布する。

8. コブノメイガ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

- ① 県南部（田辺市以南）の早期栽培における6月上旬の25株あたり被害葉数は0葉（平成0葉）であった。
- ② 紀の川市の蛍光灯誘殺箱による6月1～20日の誘殺数は0頭（平成0頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 第1世代の発蛾最盛期は平成7月下旬頃である。防除適期は、粒剤の場合第1世代の発蛾最盛期、その他の薬剤（乳剤、水溶剤、フロアブル

等) の場合は第 2 世代幼虫発生時期 (第 1 世代の発蛾最盛期の 7 日後) である。

- ② 幼穂形成期後、出穂期頃までに上位 2 葉の被害葉率が 40% になると 10% 程度減収する。それ以降の被害は被害葉率 80% 以上でも収量・品質に及ぼす影響は小さいので、県南部の早期栽培では防除の必要性は低い。

※ 水稲害虫の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の水稲害虫の予察灯誘殺消長も参考にする。

Ⅱ. 野 菜

<ウリ科野菜>

1. 疫病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (平年 0%) であった。

③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (過去 9 年の平均 0%) であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 0% (過去 9 年の平均 2%) であった。

③ 県北部の施設栽培キュウリにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 33% (平年 27%) であった。

④ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 同一系統の薬剤の連用は耐性菌の発生を助長するので、複数系統の薬剤によるローテーション散布を行う。

3. つる枯病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 10% (平年 0%)、発病葉率は 0.1% (平年 0%) であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 7% (平年 8%)、発病葉率は 0.1% (平年 2.0%) であった。

③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 降雨にともない株元から発病するので、薬剤散布にあたっては薬液が株元にも十分かかるように行う。

4. 炭疽病

- (1) 予報内容 発生量 やや多 (スイカ 県中部：多)
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は20% (平年7%)、発病葉率0.3% (平年0.3%)であった。
 - ② 県中部の露地栽培スイカにおける6月中旬の発生ほ場率は100% (平年14%)、発病葉率7.4% (過去9年の平均1.5%)であった。
 - ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 発病した茎葉や果実は、ほ場外に持ち出す。
 - ② 降雨日が連続すると多発する可能性があるため、長雨が予想される場合は予防散布を実施する。
 - ③ スイカの炭疽病については、令和3年度病害虫発生予察注意報第3号 (5月26日発表)、病害虫防除技術情報第3号 (6月14日発表)を参照する。

<ナス科野菜>

1. 疫病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は0% (過去7年の平均0%)であった。
 - ② 県中部の露地栽培ミニトマトにおける6月中旬の発生ほ場率は0% (過去8年の平均5%)であった。
 - ③ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 梅雨末期の多雨で急激に病勢が進展するため、降雨前の予防散布に努める。予防散布ができなかった場合は降雨後に早急に防除する。
 - ② ほ場の排水を良くし、冠水や滞水を防ぐ。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の生息葉率は、モモアカアブラムシ0% (平年1.4%)、ワタアブラムシ0% (平年1.8%)であった。
 - ② 県中部の露地栽培スイカにおける6月下旬のワタアブラムシの発生ほ場率は89% (平年65%)、生息葉率は5.6% (平年5.3%)であった。
 - ③ 黄色水盤 (紀の川市) による6月1~20日の誘殺数は43頭 (平年107.9頭)であった。
 - ④ 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
- ① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。
 - ② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 県北部 並
県中部 やや多
- (2) 予報の根拠
- ① 県北部の露地栽培ナスにおける6月中旬の発生ほ場率は、カンザワハダ

ニ 29%（平年 35%）、ナミハダニ 0%（平年 8%）であった。

② 県中部の露地栽培スイカにおける 6 月下旬の発生ほ場率は、カンザワハダニ 89%（平年 35%）、ナミハダニ 0%（平年 20%）であった。

③ 7 月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるために、同一系統の薬剤は連用しない。

② 薬剤散布にあたっては薬液が葉裏に十分かかるように行う。

3. ミナミキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 43%（平年 19%）、生息葉率は 17.7%（平年 6.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発生が多い場合は 4～5 日間隔で 2 回以上、薬剤を散布する。

② 施設栽培では、栽培終了後に抜根した上で 7～10 日間以上施設を密閉してアザミウマを死滅させ、後作や周辺の野菜等での発生源にならないようにする。

4. ミカンキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部の露地栽培ナスにおける 6 月中旬の発生ほ場率は 14%（平年 10%）、生息葉率は 0.6%（平年 1.6%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ミナミキイロアザミウマに準ずる。

5. シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県中部の露地栽培スイカ（性フェロモン剤による交信攪乱処理を実施していない地区）における 6 月下旬の被害果率は 0%（平年 1.2%）であった。

② フェロモントラップによる 6 月 1～20 日の誘殺数は、紀の川市 14 頭（平年 15.4 頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 若齢幼虫を対象に初期防除に努める。

② 幼虫は作物の生長点付近の未展開葉に潜入するので、薬剤による防除効果が上がりにくい。初期は局部的に発生するので、管理作業時に見つけしだい捕殺する。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. 黒点病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における 6 月上旬の発生ほ場率は 22%（平年 12%）、発病果率は 4.7%（平年 1.3%）で

あった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① マンゼブ剤またはマンネブ剤を用いる場合、散布後の累積降水量が200～250mmとなった時点または1か月を経過した時点のどちらかの早いタイミングで次の散布を行う。

② 過乾燥等で樹勢が衰弱すると伝染源の枯れ枝が増えるおそれがあるため、かん水等の栽培管理を適切に行う。

③ 令和3年5月21日発表の病害虫防除技術情報(第2号)と6月23日発表の同情報(第4号)を参照する。

2. かいよう病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部(海南市下津町)、県中部、県南部(田辺市)における6月上中旬の春葉での発生ほ場率は22%(平成22%)、発病葉率は0.3%(平成1.0%)であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 罹病枝葉は果実への伝染源になるので剪除する。

② ミカンハモグリガの食害痕は病原菌の侵入口となるため本害虫の防除を徹底する。

③ 罹病性品種では強風雨前に銅水和剤の予防散布を徹底する(薬害軽減のための措置を講じる)。

④ 防風ネット設置などの防風対策に努める。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部(海南市下津町)、県中部、県南部(田辺市)における6月上中旬の発生ほ場率は17%(平成34%)、発生葉率は7.2%(平成11.6%)、100葉あたり雌成虫数は20.5頭(平成44.2頭)であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 薬剤抵抗性の発達を遅らせるため、同一系統の薬剤を年間に2回以上使用しない。

② 薬剤抵抗性対策として97%・98%マシン油乳剤の散布を励行する。ただし、高温強日射時の散布は薬害が発生しやすいうえ、7月中旬以降の散布は果実品質を低下させるおそれがあるので、散布は7月上旬までとする。

4. ヤノネカイガラムシ

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 県北部(海南市下津町)、県中部、県南部(田辺市)における6月上中旬の発生ほ場率は0%(平成1%)であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 6月下旬に防除できなかつた発生ほ場では、7月上旬に未成熟成虫に対しても効果が高いDMTP乳剤(スプラサイド乳剤40)を散布する。

5. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察ほ場（無防除）における黄色粘着トラップによる6月1～20日の誘殺数は、由良町227頭（平年333頭）、有田川町148頭（過去7年の平均78頭）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 地域での発生活消長調査の結果を参考に適期防除に努める。

6. ゴマダラカミキリ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部（海南市下津町）、県中部、県南部（田辺市）における6月上旬の発生ほ場率は0%（平年1%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 成虫の捕殺に努めるとともに、薬剤を散布する。

② 発生が多いほ場では、7月中旬以降に成虫の産卵防止および幼虫対象の防除として薬剤を主幹から株元に散布する。

<カ キ>

1. 炭疽病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部における6月中旬の発病新梢率は「富有」0.1%（平年0%）、「平核無」・「刀根早生」で0%（平年0%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病枝や発病果がみられる場合は剪除する。

② 密植ほ場や風通しの悪い場所は発病しやすいので、ほ場内の通風・採光をはかる。

③ 薬剤は発育枝にも十分散布する。

2. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部における6月中旬の発生ほ場率は「富有」47%（平年42%）、「平核無」・「刀根早生」12%（平年12%）であった。発病葉率は「富有」2.6%（平年2.1%）、「平核無」・「刀根早生」0.5%（平年0.4%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 病原菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏に丁寧に散布する。

② 盛夏期には一時病勢は停滞するが、好適な気象条件やほ場条件で秋期まで二次伝染を繰り返すので、二次伝染の防止に努める。

3. 円星落葉病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は0%（平年43%）、発病葉率0%（平年5.3%）であった。

② 7月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 子のう胞子飛散は、5月上中旬から始まり、5月下旬～7月中旬の降雨後に多い。二次感染はしない。
- ② 薬剤防除は、5月から8月までマンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

4. 角斑落葉病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年10月の「富有」における発生ほ場率は77%（平成68%）、発病葉率は11.2%（平成12.2%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 分生子による感染は5月上中旬から始まり、7月中下旬まで続く。二次感染を繰り返す。
 - ② 薬剤防除は、円星落葉病に準ずる。

5. フジコナカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における6月中旬の発生ほ場率は「富有」12%（平成26%）、「平核無」・「刀根早生」6%（平成4%）であった。寄生果率は「富有」0.5%（平成1.5%）、「平核無」・「刀根早生」0.1%（平成0.2%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期である。
 - ② 予察ほ場（無防除、紀の川市粉河）における近年の第2世代ふ化幼虫の初発は7月下旬頃であり、次の防除適期は8月上旬頃と思われる。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における6月中旬の発病葉の発生ほ場率は60%（平成77%）であった。発病葉率は3.1%（平成5.3%）、発病果率は1.7%（平成5.2%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 防風対策に取り組む。防風ネット、防風樹設置ほ場では保守点検を行う。
 - ② 翌年の伝染源軽減のため、秋季に無機銅水和剤を散布する。

2. カイガラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県北部における6月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシの発生ほ場率は0%（平成5%）、雌成虫寄生枝率は0%（平成0.2%）であった。
 - ② 7月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹体生育期における防除適期は、ふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生盛期の直前に薬剤散布を実施する。

- ② 県北部の第2世代ふ化幼虫発生盛期は、ウメシロカイガラムシが7月7日前後、クワシロカイガラムシが7月9日前後と予想される。

<果樹全般>

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

- ① 紀の川市粉河の予察灯での6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが61頭（前年101頭、平年124頭）、ツヤアオカメムシが70頭（前年481頭、平年217頭）であった。
- ② 有田川町奥の予察灯での6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが1頭（前年30頭、過去7年の平均196頭）、ツヤアオカメムシが3頭（前年166頭、過去7年の平均294頭）であった。
- ③ みなべ町東本庄の予察灯での6月1～20日の誘殺数は、チャバネアオカメムシが175頭（前年107頭、平年415頭）、ツヤアオカメムシが259頭（前年755頭、平年1,149頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① ほ場内への多飛来を確認したら早急に薬剤散布を行う。
- ② 今後の発生動向については、農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所の果樹カメムシ情報や、各地域の振興局農業水産振興課、JA等の情報を参考にする。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○**農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ** <農作物病虫害防除所>

[https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/
boujyosyo-yosatsujyouhou.html](https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html)

○**和歌山県ホームページ** <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>

※詳しくは、農作物病虫害防除所の各担当までお願いします。

水稲、野菜、花き

本所（紀の川市、農業試験場内）

TEL 0736-64-2300

カンキツ

有田川駐在（有田川町、果樹試験場内）

TEL 0737-52-4320

カキ、モモ

紀の川駐在（紀の川市、果樹試験場かき・もも研究所内）

TEL 0736-73-2274

ウメ

みなべ駐在（みなべ町、果樹試験場うめ研究所内）

TEL 0739-74-3780